様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　８ 日現在

機関番号：３４５０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２３９６

研究課題名（和文）少女マンガ黎明期のジャンル形成過程における制作者の役割に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study on the role of creators in the dawn of shojo manga

研究代表者
増田　のぞみ（MASUDA, Nozomi）

甲南女子大学・文学部・准教授

研究者番号：８０４４９５５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、少女マンガ黎明期のジャンル形成過程において作家や編集者がどのような役割を果たしたのかを明らかにすることである。本研究では、少女マンガ黎明期に活躍した作家や編集者らによる座談会が1999年と2000年に合計4回開催された「少女マンガを語る会」の活動に注目し、この座談会の記録を報告書として後世に残すための作業を進めた。作家や編集者の語りからは、当時の作家たちは編集部の編集方針にただ従っていたわけではなく、それぞれが時代に合わせて、読者のニーズを敏感に感じ取りながら、自分が描きたい物語世界を明確に表現してきたということが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、この貴重な座談会の記録を『「少女マンガを語る会」記録集』（監修：水野英子、編著：ヤマダトモコ・増田のぞみ・小西優里・想田四、2020年6月）として報告書にまとめることができた。「語る会」のメンバーは全員作家であり、この活動は、自身が歴史を作り出してきた作家たちが、少女マンガというジャンルのルーツを自ら辿ろうとしたものである。そこで語られた内容は、読者が残された作品や雑誌資料などから辿ることは難しい、制作者（作家や編集者）にしか知り得ない貴重な情報ばかりであり、少女マンガの歴史を辿るための貴重な資料となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify what role the authors and editors played in the process of genre formation in the dawn of shojo manga. In this research, we focused on the activities of the "Talk Meeting on Shojo Manga", which was held four times in 1999 and 2000 for a roundtable discussion between writers and editors who were active in the early days of shojo manga. We worked on leaving a record of these discussion for posterity. From the narratives of the writers and editors, it became clear that the writers of the time were not only following the editorial policy of the editorial department, but that each of them had clearly expressed the world and the story they wanted to depict, adapting to the times and being sensitive to the needs of their readers.

研究分野：メディア文化研究、マンガ研究

キーワード：少女マンガ　マンガ文化　出版文化　雑誌研究　少女向けメディア　ポピュラー文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（１）「少女マンガ」というジャンルの希少性

主に若年層の女性をターゲットとする「少女マンガ」というジャンルが、日本ほどの質と量を伴って展開されている国は珍しい。例えばフランスにおいては、コミック文化自体は盛んであるにもかかわらず少女向けのジャンルは成立しておらず、作品自体が少ない。また、アメリカにおいても同様にコミック文化は子供と男性のものというイメージが強く、少女向けの市場は明確には存在しなかった。2000 年代の北米においてマンガ市場が急成長した背景のひとつとして、少女マンガ市場の開拓があったと考えられる。ではなぜ戦後の日本においては、少女マンガというジャンルがこれほど拡大し得たのだろうか。その問いに答えるためには、黎明期の少女マンガの形成過程を明らかにし、日本における戦後の出版文化の特徴、女性向けメディアのあり方を再考する必要がある。

（２）注目されない「黎明期」

少女マンガの黎明期は、戦前から続く少女向けの雑誌に徐々にマンガのページ数が増えていき、さらに描き手として若い女性の作家が複数登場するようになる 1960 年前後とされる。しかし、これまでの少女マンガ研究においては戦後生まれの女性作家が活躍を始める 1970 年代が少女マンガの「黄金期」と捉えられており、戦前に生まれた作家や作品が研究対象となることは少なかった。少女マンガに関する唯一の通史となる米沢嘉博の『戦後少女マンガ史』（1980）をはじめ、米沢の著作では戦前の少女雑誌の時代に遡って議論されていることも多いが、少女マンガの黎明期については未だ十分に明らかにされたとは言い難い。これまでに研究対象とされた作家や作品、雑誌、出版社はごく一部（例えば手塚治虫など）にとどまり、個別の作家に対する論稿やインタビュー記事などは散見されるものの、当時の制作環境や表現の特徴、ジャンル全体を見据えた研究は少ない。

２．研究の目的

本研究の目的は、少女マンガ黎明期のジャンル形成過程において作家や編集者がどのような役割を果たしたのかを実証的に明らかにすることである。戦後日本のメディア文化をより深く理解するためには、少女マンガという世界的にも稀有なジャンルがどのような作家や編集者によって作られてきたのか、黎明期の少女マンガの形成過程を多角的に問う必要がある。既に 80 歳を超え、高齢化する関係者たちの貴重な声を次世代に残す。雑誌資料を読むだけではわからない制作の状況、当時の作家と編集者の関係、雑誌と読者の関係を掘り下げる。これらの作業を通して、少女マンガ黎明期の再評価につなげるとともに、戦後のマンガ文化や出版文化、女性向けメディアの歴史に関する理解を深める契機としたい。

３．研究の方法

（１）「少女マンガを語る会」への注目

本研究では、少女マンガ黎明期に活躍した作家や編集者らが集った「少女マンガを語る会」の活動に注目し、この座談会の記録を報告書として後世に残すための作業を進めた。「少女マンガを語る会」は、「初期の少女マンガに関する記録を、当事者として残しておきたい」という水野英子の呼びかけに賛同した作家が集まって開催されたもので、1999 年から 2000 年にかけて、合計 4 回の座談会が行われている。

「語る会」のメンバーは、発起人となる水野をはじめ、上田トシコ、むれあきこ、わたなべまさこ、巴里夫、高橋真琴、今村洋子、ちばてつや、牧美也子、望月あきら、花村えい子、北島洋子―と、いずれも少女マンガの黎明期となる 1950 年代から 1960 年代にかけて、少女向けの雑誌や単行本等で活躍した経歴を持つ 12 名の錚々たる作家たちである。各回のゲストには、少女向け雑誌の編集者や貸本マンガの関係者など、当時のマンガの制作現場に深く関わった主要な人物が含まれている。

「語る会」のメンバーは全員作家であり、この活動は、自身が歴史を作り出してきた作家たちが、少女マンガというジャンルのルーツを自ら辿ろうとしたものだ。そこで語られた内容は、読者が残された作品や雑誌資料などから辿ることは難しい、制作者（作家や編集者）にしか知り得ない貴重な情報ばかりである。

以下に、各回の概要とゲストを示す。「語る会」メンバーとなる作家は各回にそれぞれ参加している。（肩書きは開催当時のもの、敬称略）

＜「少女マンガを語る会」概要＞

第 1 回 ファンの方を迎えて（1999 年 9 月 26 日）

ゲスト：ファンの女性 5 名、青島広志（音楽家）、三谷薫（経葉社）

第 2 回 編集者の方たちを迎えて（1999 年 11 月 15 日）
ゲスト：丸山昭・新井善久（元講談社）、岡田光（元光文社）、徳永孝雄（集英社）、
飯田吉明・山本順也（元小学館）、神永悦也（秋田書店）
第 3 回 貸本少女マンガについて その 1（2000 年 5 月 30 日）
ゲスト：北村二郎（元若木書房社長）、柳瀬昭三（元若木書房）、矢代まさこ（マンガ家）、
内記稔夫（現代マンガ図書館館長）、長谷川裕（ライター）、
中野晴行（フリー編集者・ライター）
第 4 回 貸本少女マンガについて その 2（2000 年 8 月 2 日）
ゲスト：古城武司、竹本みつる、富永一朗、西奈貴美子、東浦美津夫、
みなもと太郎、矢代まさこ（すべてマンガ家）
柳瀬昭三（元若木書房編集）、中野晴行（フリー編集者・ライター）

（２）報告書（記録集）作成にあたっての裏付け調査

この座談会は、関係者の方々が、それぞれに数十年前の忙しく過ごされていた日々の出来事を思い出しながら、過去を振り返った語りとなっている。あくまでも各話者の記憶やその思いが率直に述べられた内容であり、記録集においても、基本的にはそれらをそのまま残すことを尊重している。

一方、今回のプロジェクトにおいては、少女マンガの黎明期の記録を次世代に伝えるという報告書としての目的を重視し、事実関係が確認できる事柄については、できる限り発言内容の裏付け調査を行い、註釈として反映させることとした。この調査には、編著者であるヤマダトモコ、「図書の家」の小西優里をはじめ、想田四、日高利泰、粟生こずえという、マンガ関連の調査や研究に豊富な経験を持つ、このうえない面々が協力者として参加してくださった。こうした調査の結果、新たに判明した事柄を註釈に盛り込んでいる。また、できるだけ多くの図版によって、当時の作品を紹介できるよう努めた。こうした註釈や図版によって、報告書（記録集）の意義をより深めることができた。

４．研究成果

本研究の成果については、『「少女マンガを語る会」記録集』を作成し、報告書としてまとめている（監修：水野英子（「少女マンガを語る会」発起人）、編著：ヤマダトモコ・増田のぞみ・小西優里・想田四、註釈執筆及び図版選：日高利泰・粟生こずえ・小西優里・想田四・ヤマダトモコ、2020 年 6 月）。そのなかで、記録集を作成する過程で交わされたさまざまな議論や新たな発見、本記録集の意義などについて、「少女マンガ黎明期を考える視点――「少女マンガを語る会」記録集の意義」（増田のぞみ、pp.201-207）と題した論稿にまとめた。

その概要は、以下のとおりである。

（１）「デビュー」を考える

1999 年に行われた第 1 回の座談会では、「少女マンガを語る会」メンバーとなる作家たち 12 名のデビューの経緯が詳しく語られた。現在のように、出版社が募集する新人賞やマンガスクールへの投稿といったデビューへの道筋が整っていなかった少女マンガ黎明期の作家たちが、じつに多様な経緯を経て、大手出版社が発行する少女マンガ誌での活躍という過程を歩んでいる点が興味深い。

記録集では、表紙に各作家のデビュー年を記載し、デビュー順に図版を並べているが、この「デビュー」をめぐっては、作業の過程でさまざまな議論があった。座談会の中での作家や関係者たちの発言においても、「デビュー」が何を指しているかは、文脈によってさまざまに異なる。筆者が冒頭の「メンバー紹介」においてプロフィールの執筆を担当した際、12 名の各作家の経歴をまとめるため各種資料を参照すると、これまで複数の媒体で目にしてきた作家たちの経歴には、じつにさまざまに異なる記載があることがわかった。

「デビュー」に関する記述では、赤本や貸本の描き下ろし単行本や貸本短編誌に掲載された作品を含むか、別名義での作品を含むか、カットやコママンガといったストーリーマンガ以外の作品、別冊付録への掲載作品を含むかなど、大手出版社の雑誌にストーリーマンガを掲載するという本格的な「雑誌デビュー」に至る前の経歴をどの時点からどう拾うかによって、デビュー年が大きく違ってくる。記録集では、各作家の多様な活動を知るうえで欠かせない情報として、雑誌での本格的なデビューよりも前の経歴をより詳細に明らかにすることを目指した。表紙およびメンバー紹介、註釈などに記載されたデビュー年は、作家自身の発言内容やインタビュー記事などをもとに調査を行い、その時点でわかる範囲で判断している。

第一線で活躍する作家たちは創作意欲が旺盛で、小学生の頃からストーリーマンガを描いて学校で友達に読ませていたり、学校内の新聞などに作品が掲載された経験を持つ作家も多い。肉筆回覧誌や同人誌などでの活動まで含めれば、さらに多様な「デビュー」があるだろう。この記録集では、マンガを描くことで報酬を受け取り、「仕事」として成立した時点がプロのマンガ家としての「デビュー」ではないかと考え、各作家のデビュー年を判断した。

例えば、水野英子の場合、『少女クラブ』（講談社）にて 1956 年に「赤っ毛小馬（ポニー）」が

掲載される前年の 1955 年に、読者ページの扉絵やカット、コママンガなどがすでに掲載されている。そのため 1955 年を「デビュー」、1956 年を「本格デビュー」と記載した。また、北島洋子は 1962 年の『少女クラブ』お正月臨時増刊号にて「氷の城」が掲載される前の 1960 年から 1961 年頃にかけて、「ミナミヒロコ」というペンネームにて貸本少女マンガ短編誌で活動していた時期がある。そのため、「デビュー」を 1960 年とし、「雑誌デビュー」を 1962 年とした。

さらに、むれようこが『神戸新聞』での連載の前に、戦後に復刊された『神戸又新日報』にて「又子と新ちゃん」という作品を連載していたという情報について、今回ご本人に確認することができ、デビュー年を 1951 年としている。新聞紙上でコママンガを連載した後に、ストーリーマンガを描いて活躍するむれのような例は珍しい。こうした本格的なデビューに至る以前の活動の経緯が少しでも明らかになっていくことは、黎明期の少女マンガの全体像を知るうえで欠かせない資料となるだろう。

（２）マンガ研究の基礎となる知識

先に述べた「デビュー」という言葉が何を指すかが文脈によって異なるといった事象は、他のさまざまな用語にもみられた。何気なく使われる「赤本」や「貸本」、「単行本」、「貸本単行本」、「貸本短編誌」といった用語、雑誌資料の表記に関わるさまざまなバリエーションの問題などである。

貸本の出版社や貸本店を営む関係者の方々が集った第 3 回の座談会では、貸本屋と古本屋の関係や「赤本」のルーツなどについて議論されているが、そこでは、新刊の書籍を貸し出す書店が出現するなどの経緯もあり、何を「貸本」と呼ぶのかは自明ではないという指摘がなされている。

「赤本」と「貸本」についても同様に、どのような出版社がどのような方法で販売するかによって、はっきりとは区別できない部分があり、議論が分かれるところだろう。また、当時を知る関係者や読者には、「赤本」も「貸本」も雑誌との対比ですべて「単行本」と呼ぶケースも珍しくない。若い世代では、後の「新書判コミックス」のみが「単行本」だと考える読者が多く、この用語も注意が必要だ。

一方、雑誌資料については、一般的に表紙等に記載されている表記を用いて「○○年○月号」と書かれる場合が多い。「メディア芸術データベース」では「表示年」「表示月」「表示日」と表記されている情報である。ただし、作家や編集者にとっては執筆している時期、あるいはその号の発売日に準じて「○年○月」と語られることがある。とくに「お正月号」と表記される「1 月号」が前年の 12 月に発売されている場合、作家や編集者などの関係者や読者によって前年の年号で語られることも多く、いつの、どの号の話をしているのか混乱が生じるケースもある。

雑誌に関しては、「創刊」についても一連の作業の過程でさまざまな議論が交わされた。雑誌の「創刊」とは、基本的には「第 1 巻第 1 号」が「創刊号」であると考えられるが、背表紙などに小さく書き込まれる「巻号」に注目する読者は少ない。第 2 回の座談会で複数の図版を紹介しているように、『ひとみ』（秋田書店）や『ちゃお』（小学館）、『YOU』（集英社）の創刊が語られるとき、それぞれいつの時点を指しているのかは自明ではない。例えば、『ちゃお』には、『別冊少女コミック』の増刊として 1972 年に誕生した時点での創刊号と、1977 年に『ちゃお』として独立した時点での創刊号が存在する。雑誌の創刊については、「独立創刊」、「復刊創刊」などの言葉を適宜使用することとした。

さらに、マンガ家が複数の名義や表記を使い分けている場合に、どのような表記を用いるかについてもさまざまな議論があった。例えば、石ノ森章太郎は少女マンガ黎明期であった 1950 年代や 1960 年代には「石森」であったが、この座談会が行われた時点ではすでに「石ノ森」となっていた。話し手や書き手によって表記はどちらも使われている。「別名」や「別名義」などの用法とも合わせて、適宜検討が必要となった箇所である。

今回、上記のような校正の作業を行うなかで、こうした議論を重ねていくことが、まさにマンガ文化の基礎的な研究として重要であると改めて考えさせられた。貸本や雑誌などの資料について、どの資料がどこに所蔵されているのか、目次はどのデータベースやサイトで確認することができるのかといった情報や、書籍としてまとまっている資料では、どのような文献が書誌情報などが確認された信頼できる参考文献としてふさわしいのかといった情報を含めて、マンガ文化を研究する際に知っておくべき基礎的な知識であると言えるだろう。日常的にマンガ資料に携わっている方々には自明な内容が多いかもしれないが、マンガ研究をこれから始める初学者にとっては、容易に知ることは難しい暗黙知のようなものでもある。近年進められているマンガ資料のアーカイブやデータベースの整備とともに、こうした知識も共有されることで、マンガ文化への理解はより深まるはずである。

（３）少女マンガ黎明期における作家と編集者

また、この記録集を通して見えてくる、少女マンガ黎明期における制作者の役割、作家と編集者との関係についても振り返っておきたい。第 2 回の座談会からもわかるように、少女マンガ黎明期に大手出版社で編集者として働く社員たちは、男性ばかりであった。第 2 回の座談会では、元講談社の丸山昭をはじめとした出版社の社員である編集者たちは当時、少女マンガのことも読者となる少女たちの文化についても、わからないことばかりだったと語っている。それに対し

て、少女マンガ黎明期の作家たちには、自らが描きたいものを描いてきたという語りが目立つ点が注目される。

とくに、第１回の座談会において、わたなべや高橋、牧などは、淡い色を用いたカラー絵や華やかで大胆なコマ構成などの表現の特徴について、それらは編集部の指示があったわけではなく、自分の好きなように描かせてもらっていたと繰り返し語っている。同じく第１回の座談会でちばてつやが語った、「ユカをよぶ海」において男の子をひっぱたく女の子を描いたエピソードからは、作家の思い切った表現が読者に支持され受け入れられることで、作風が変わっていった様子がうかがえる。

少女マンガならではの表現として知られる「スタイル画」については、「企画」として編集部から取り入れるよう指示があったのではないかと考えていた。この点については、水野が編集部からの指示があったと語っている一方で、高橋は指示されていたわけではなく、好きなように描いていたと答え、牧も「突然入れることもあった」と語っている点が注目される。

牧は、雑誌掲載時の扉絵などのカラーページにおいて、日本人の女の子の髪の色を緑や青、紫色などの黒ではない色で自由に描いた点について、電話で問いにお答えくださった。そこには何かの影響があったわけではなく、扉絵などで日本人の女の子を大きく描く場合、画面に占める髪の毛の割合が多くなり、黒い髪色のままだと画面が暗くなってしまうということで、少しでも画面を明るくしたいという思いから、自然にいろいろな色を使うようになったとのことだった。これらの語りからは、牧やわたなべ、高橋は一貫して、自身が好きに描いてきたという認識を持っていることがわかる。また北島が、デビューした当時は週刊誌時代を迎えた時期であり、マンガ家の数が足りなかったことで、自由に描かせてもらえたのではないかと語っている点も、作家と編集者の関係を考えるうえで時代背景として重要な論点になるだろう。

ただし、花村による「どこに行っても花村さん泣かせてくれ」と言われたという証言や、赤などのはっきりとした色を使うように指示され、中間色はなかなか使わせてもらえず、勝手に色を変えられることすらあったという証言が複数みられる。こうした語りからは、各作家によっても、出版社の気風や担当となる編集者によっても、それぞれに事情が異なることがうかがわれる。とくに、第２回の座談会において岡田光氏が語っているように、光文社の『少女』は黒崎勇という名編集長のもと、「あんみつ姫」のストーリーを編集者が考えたり、少女小説のプロットのようなものを小説家に依頼して書かせ、それをマンガ化する手法など、編集部が明確な編集方針を示して主導していたことがわかる。しかし、その『少女』においても、高橋にはとくに指示をするようなことはなく、好きに描かせていたという点も見逃せない。そこから高橋は、マンガのなかに抒情画を取り入れ、新しい抒情画の世界を切り開いていく。『少女』は、独自のスタイルを持った雑誌として人気を得ていた例と言える。

このように、それぞれの少女マンガ誌を担当した編集者の語りからは、雑誌によってそのスタイルは異なるものの、編集部の編集方針が強固にあり、作家がそれに従っていた例は少なく、それが少女マンガ全体の流れを決定づけてきたとは考えにくいということがわかる。作家たちの語りからも、やはりそれぞれの作家がその時代に合わせて、読者のニーズを敏感に感じ取りながら、そのうえで自分が描きたい物語世界を明確に表現してきたことが示された。それによって、少女マンガの黎明期をたしかに形作り、後のマンガへも大きな影響を与えることとなったのではないかと考えられる。

また今回の座談会では、女性作家がどのように増えていったのかという経緯や、編集者がどのように作家を囲い込み、他誌に奪われないようにガードしていたかといった具体的なエピソードも語られている。この記録集の作成を通して、少女マンガ黎明期の作家と編集者の関係を、より具体的に理解することができた。

ただし、少女マンガ黎明期については、いかにわからないことが多いかという点も改めて痛感させられた。例えば、牧の初期作品に関しては、『母恋ワルツ』などの貸本についても、「白いバレエぐつ」をはじめとした雑誌掲載作品についても、まだまだわからない点が多く残されている。また、むれが『神戸又新日報』で連載したという「又子と新ちゃん」についても、『神戸又新日報』が戦後に復刊されていたとのことだが、その現物を確認することはできていない。さらに、今村はマンガを「家業」とする一家に育ち、早くから父である今村つとむの手伝いをすることでマンガを描くようになった。父親名義の作品がデビュー作とされているが、今村家ではマンガ制作がどのように行われていたのか、その詳細は明らかになっていない。

こうした各テーマについては、今後さらに掘り下げた調査が展開されることが期待される。黎明期の少女マンガ研究はまだ始まったばかりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 増田のぞみ・猪俣紀子	４．巻 55
２．論文標題 少女マンガ雑誌における「外国」イメージ――1960～1970年代の『週刊少女コミック』分析より	５．発行年 2019年
３．雑誌名 甲南女子大学研究紀要Ⅰ　文学・文化編	６．最初と最後の頁 pp.65-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 少女マンガ黎明期を考える視点ーー「少女マンガを語る会」記録より
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 The Dawn of Shojo Manga in Japan
３．学会等名 Japanese Studies Program Seminar (The University of Melbourne)
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 少女マンガ黎明期における作家と編集者――「少女マンガを語る会」記録より
３．学会等名 武庫川女子大学・情報美学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 少女マンガジャンルの誕生とその広がり――黎明期を支えた作家たち
３．学会等名 「松本零士＆牧美也子の世界展」クロージングイベント（田中一村記念美術館）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 男女共同参画セミナー「少女マンガから考えてみよう　男女共同参画のこと」
３．学会等名 男女共同参画あまみ会議（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 マンガが描く「ヒロイン」の姿～「働きマン」から「逃げ恥」・「傘寿まり子」まで～
３．学会等名 男女共同参画推進セミナー「これからを生きるヒント講座」（奈良県女性センター）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 黎明期少女マンガと牧美也子ーー「少女」イメージと女性向け「劇画」をめぐって
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 男女共同参画セミナー「マンガで考える男女共同参画ーマンガから見えてくることー」
３．学会等名 兵庫県立男女共同参画センター
４．発表年 2018年

１．発表者名 増田のぞみ
２．発表標題 黎明期少女マンガとわたなべまさこーー女性作家の台頭とジャンルの広がり
３．学会等名 中部人間学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 監修：水野英子、編著：ヤマダトモコ・増田のぞみ・小西優里・想田四	４．発行年 2020年
２．出版社 甲南女子大学	５．総ページ数 212
３．書名 『「少女マンガを語る会」記録集』（研究成果報告書）	

１．著者名 増田のぞみ（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 170
３．書名 『宝塚イズム40』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	猪俣　紀子 (INOMATA Noriko) (20734487)	茨城大学・人文社会科学部・准教授 (12101)	
研究分担者	東　園子 (AZUMA Sonoko) (40581301)	京都産業大学・現代社会学部・准教授 (34304)	
研究分担者	谷本　奈穂 (TANIMOTO Naho) (90351494)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	
研究分担者	山中　千恵 (YAMANAKA Chie) (90397779)	京都産業大学・現代社会学部・教授 (34304)	
研究協力者	水野　英子 (MIZUNO Hideko)		
研究協力者	ヤマダ　トモコ (YAMADA Tomoko)		
研究協力者	小西　優里 (KONISHI Yuri)		
研究協力者	想田　四 (SODA Yon)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	日高　利泰 (HIDAKA Toshiyasu)		
研究協力者	粟生　こずえ (AOU Kozue)		